

そこに 学校があった

休廃校の歴史

大奈路小学校 (下)

平成以降に休廃校になった学校を中心に振り返ります。

校区は広がれど変わらぬ熱量

大正町内全校で完全給食が開始され、着々と近代化が図られていながらも、児童数は減少していったと前号で書いた。この流れは、日本が高度成長期真っ只中に突入し、産業構造が転換していくことと連動していて、大奈路に限ったことではなく、全国津々浦々で起きていたことである。



給食の様子。始まりは脱脂粉乳からであった（閉校記念誌より）

しかし、児童数が減少したからといって、子どもたちの活気がなくなったわけではない。そして、保護者たちも、また、大奈路小学校校区における地域住民も、それまでと変わらぬ熱量で「私たちの地域の学校」として関わり続け、支え続けた。変わっていったのは「私たちの地域の学校」の、この「地域」つまり校区が、徐々に広がっていったことである。それは、周辺地区の学校における児童数減少による統合によってであった。大奈路小学校の分校であった下道が廃校となった1969(昭和44)年。その27年後の1996(平成8)年中津川小学校休校、さらに翌年、下津井小学校が休校となり大奈路小学校に統合となる。

かえって賑やかになった！

下道の子どもたちが大奈路へ通うようになり、さらに時代は過ぎて、中津川や下津井の子どもたちが加わっていったわけだが、これにより、各々の保護者はもちろん、各々の地域住民も合流することになった。「他地域」が加わったということで、所謂「まとまり」が弱まったのかと思いきや、その逆で「かえって賑やかになったように思う」という。異なる地域同士がすぐに一体となれる素地は、辺り一帯の地形と産業を基礎とした「つながりの歴史」にあるのかもしれない。下道出身の方によれば「お祭りなどの時だけでなく、普段のお買い物も、大抵は大奈路の商店のお世話になっていたの、元から一体感があった」という。

閉校式に見る「大奈路小学校の伝統」の証

そんな一体感は「大奈路小学校の伝統」になっていく。時代は流れ平成後期に入っても、そのことが脈々と続いてきたことは、

さまざまなエピソードが物語っている。

ある夏の日、どうしても「その授業」を受けたくない子がいた。その子は学校を抜け出した。慌ててすぐに探しに行く教員。慌ててと書いたが、その教員には心当たりがあった。「きっと〇〇さんのところだろう」果たして、その教員の推理どおり、学校近くの〇〇さんが「ちゃんとかくまってくれてました」という。この地域を理解し信頼している教員と、信頼に応える地域住民と、その中で育つ子ども。これぞ、温もりのあるトライアングルである。

また運動会ではこんなことがあった。教員も参加するリレー競技。リレーといえばバトンである。いくら快足を飛ばしても、バトン渡しで手間取ったり、途中でバトンを落とすようなことがあれば、その快足は台無しである。そこで、ある人が思いついた。「いつもよりちょっと盛り上げてみよう」たぶんこう思ったのであろう。本番前日、その人はあるものを用意したのであった。さて当日、プログラムは「そのリレー競技」に進み、出場者たちがバトンとして渡されたのは「ナマコ」であった。悲鳴と爆笑と喝采が渦巻いたことは言うまでもない。当時の教員は言う。「その人とは？ 大体の見当はついてます(笑笑)」

大奈路小学校は、2013(平成25)年3月、閉校となった。明治初期から平成後期までの長きに渡り、開校、統合、移設等を経ながら、この地域の義務教育の砦としての任を果たしてきた。この砦で活躍したのは、決して子どもたちだけではない。保護者たちはもちろん、地域住民たちの活躍の場でもあり、



最も盛り上がるのはやはり運動会（閉校記念誌より）

希望であり、安らぎであり、楽しみの場でもあった。最後の卒業生は5名であったが、閉校式には体育館に入りきれないくらいの人、人、人。校区が広範囲になりながらも、学校を真ん中に不変の一体感を持ち続けてきたことの証左である。

そこにはいつも子どもたちがいた。そこに学校があった。（おわり）



ひと足先に休校となった中学校の校舎が小学校の校舎になった

町のうごき

(7月31日)	人	口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	6,891	-2		男 3	11	12	6
女	7,432	-1		女 3	12	19	11
計	14,323	-3		計 6	23	31	17
世帯数	7,763	-1		(7月中の届出)			
窪川地域 10,247人		大正地域 1,968人		十和地域 2,108人			